

この地とこれからも

この連載では、大和ハウス工業と石川県との深い縁を、「過去」「現在」の二つの視点からたどります。第1回は、創業者・石橋信夫と志賀町との深い関わりに焦点を当てます。

第1回

創業者が追い求めた

豊かさのかたち

志賀町から始まった歩み

石川県は、大和ハウス工業とゆかりの深い土地です。その象徴の一つが、1976年から志賀町で展開した、大和ハウスグループ初の本格的なリゾート事業でした。

高度経済成長を経て、日本は物質的な豊かさを手に入れました。しかし、石橋は「本当の豊かさとは何か」を問い続けました。働き詰めだった日本人々が「心穏やかに過ごせる場所をつくりたい」。そう思った思いから、ホテルや別荘地、ゴルフ場などの機能を備えた複合リゾートの開発に着手したのです。

石橋はこの能登の地を生涯深く愛し、晩年は志賀町に別荘を構えて暮らしました。また、第二次世界大戦後、ソ連による抑留から解放された息子の帰りを待つ母親を描いた「岸壁の母の碑」を、町内に建立する活動にも尽力しました。

受け継がれる創業の志

石橋が「岸壁の母の碑」に思いを託した背景には、おそらく、自身が経験した3年間にわたるシベリア抑留があったのでしょう。

極寒の地での過酷な体験は、「人々の暮らしをより豊かにしたい」という志を育み、大和ハウス工業設立の原点となりました。

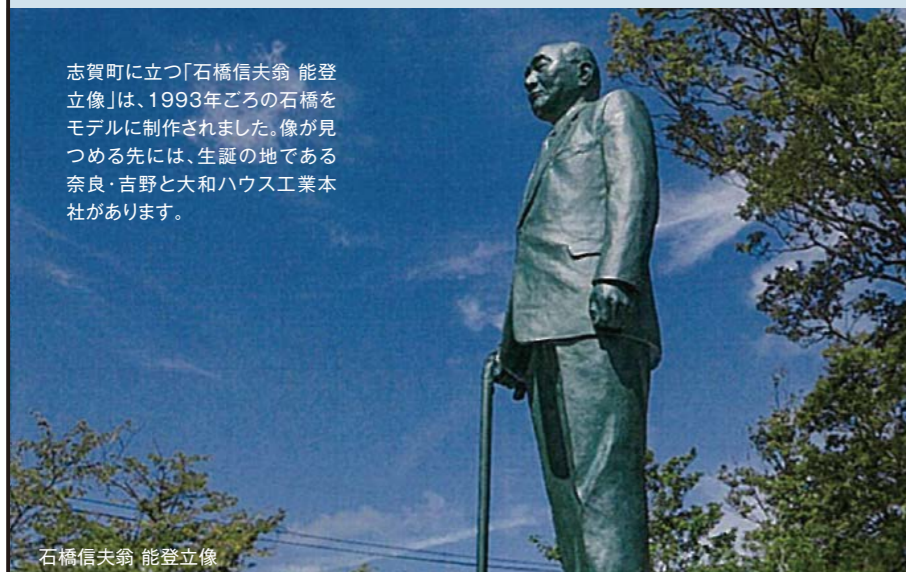
その志は志賀町でのリゾート事業でも具体化され、やがてグループ全体の揺るぎない指針として受け継がれていきました。今も私たちにとって能登・志賀町は、創業者の志を見つめ直す大切な場所なのです。

「岸壁の母の碑」は、帰らぬ一人息子を舞鶴港に通って待ち続けた志賀町出身の端野いせさんを顕彰するため、1991年に建立されました。



大和ハウス工業と志賀町の歩み

- 1976-86 ゴルフ場、別荘地を備えた「能登志賀の郷リゾート」の開発
- 2000 石橋信夫相談役(当時)が志賀町名誉市民に
- 2003 創業者石橋信夫が志賀町で逝去(81歳)
- 2016 移住・定住の促進や空き家対策に関する協定を志賀町と締結
- 2020 シェアサロン「暮らす森テラス」オープン。地域交流拠点として活用中



石橋信夫翁 能登立像



大和ハウス工業が開発したリゾート地

